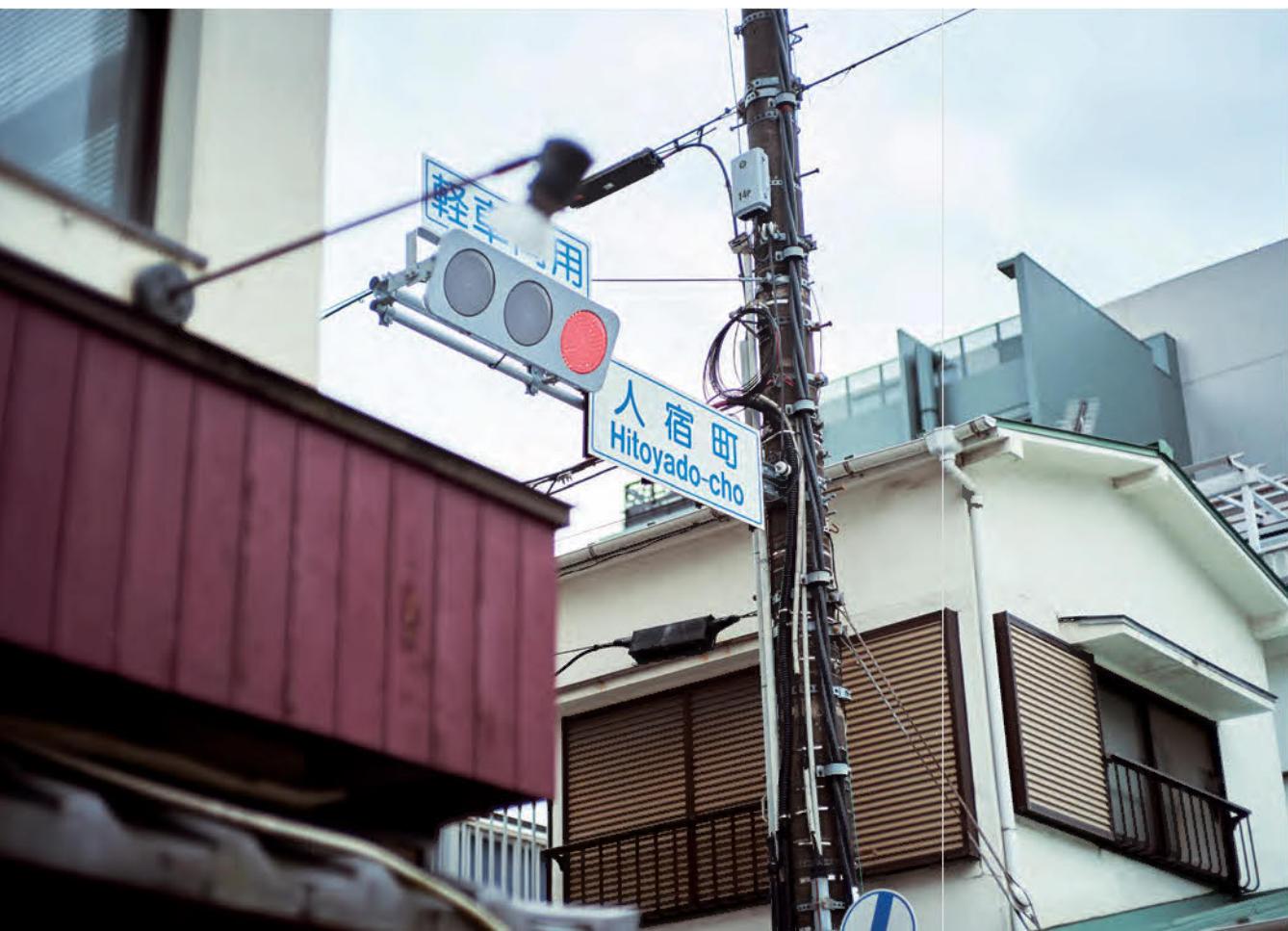




KAINO Yu / Model

KAINO Yu

静岡県出身。2014年にモデルデビューし、以来雑誌や広告を中心にモデルとして活動する。2020年秋にお茶の魅力を広げるため、日本茶のブランド「SA THÉ SA THÉ」を立ち上げる。



懐かしいあの街へ

東京を拠点にモデルとして活動するKAINO Yuさん。静岡県で生まれ育った彼女にとって、今回の旅は、どこか里帰りにも似た時間。この日も慣れた様子で東海道線に乗り、静岡駅に降り立った。よく知っているはずの故郷も、大人になってあらためて歩いてみると、新しい表情を見せてくれる——そんな期待とともに、静岡との再会の旅が、始まる。

もともと旅好きだという彼女だが、今回は久しぶりの一人旅だそう。普段の落ち着いた佇まいとは裏腹に、旅先では好奇心旺盛でアクティブな一面が覗く。

「昔はロンドンに数ヶ月滞在したこともありませう。海外サッカーファンなので、一人でマンチェスターまで足を運んだり、UK音楽の聖地巡礼をしたり。時間に余裕があれば、気ままに楽しめるタイプですね」

静岡には、帰省以外でもたびたび足を運ぶというKAINOさん。自身が主宰する日本茶ブラ

ンド〈SA THÉ SA THÉ（サテサテ）〉の活動の一環として、茶畑を訪ね、茶農家と直接言葉を交わすこともあるという。

「祖父の代から静岡でお茶の包装や加工の工場をしていて、物心ついた頃から緑茶が身近にある環境の中で育ちました。コロナが流行する1年前にブランドを始めたんですが、ちょうど地元の農家さんと話す機会があつて。お茶を日常的に楽しんでもらいたいという思いから始めたブランドですが、気づけばもう5年目になります」

静岡で生まれ育ち、いまの活動にもそのルーツが息づくKAINOさん。今回歩く人宿町には、彼女の学生時代の記憶が残っている。

「中学・高校は、市内の女子校に通っていました。友人と自転車でこのあたりまで遊びにきたのを覚えています。当時新体操部で忙しかつたんですけど、たまの休みに映画を観に行こう！って。懐かしいなあ」と笑みをこぼすKAINOさん。ありし日の思い出を胸に、足取りも軽く人宿町へと向かう。

旅のお供に、贈り物に選ぶ一冊

七間町通りと駿河町通りが交差する交差点の近くを歩いていると、ふと目に留まったのは、建物のあいだにひっそりと掲げられた小さな看板。路地の奥には、オレンジ色のほのかな明かりがともっている。早足で通り過ぎてしまえば、気づかないほどの控えめな佇まい。その路地を進んでいくと、まるで隠れ家のような本屋が現れる。

ここは「本とおくりもの ヒガクレ荘」。美術大学の友人だった小島有加さんと村松佐友紀さんが、「こんな本屋があつたらいいな」という思いをかたちにし、4年前に始めた小さな本屋だ。このお店の大きな特徴は、棚貸しをしていること。店内の本棚は、31センチ四方の正方形に区切られており、それぞれの棚が一つの“本屋”として個人に貸し出されているそう。借り手は屋号をつけ、自ら選んだ本を並べて自分だけの小さな本屋を開いている。小説、絵本、エッセイ、写真集などジャンルもさまざまな本が並び、まるで誰かの家の本棚をのぞいているかの

ような感覚に。

「この本棚、どんな人が選んだんだろうって、つい想像してしまいますね。顔は見えないけれど、趣味が似てる気がしたり、親しみを感じたり。本当に、本を通じて人とつながっているような気がして楽しいです」とKAINOさん。選んだ人の人柄や趣向が静かに伝わってくる、と本の向こう側にいる“誰か”との心の対話を楽しむように、本棚に向き合っている。

店内には、貸し棚の古本だけでなく、お客さんの声に応じて新刊も並ぶ。店名の「おくりもの」の名のとおり、大切な人に手渡したくなる本や、便箋・ポストカードなどの雑貨なども販売している。おすすめの1冊を選書担当の小島さんに尋ねると、手渡してくれたのは、古賀及汲さんの『気づいたこと、気づかないままのこと』。

「日常の出来事が日記エッセイとして綴られていて、古賀さんとお子さんとのやりとりが面白いんです。それでいて、どこか心がほどけるようなやさしさがあるんですよ」と、笑顔で教えてくれた。

1	
2	3

1. 旅や移動の時間に本を読むことが多いというKAINOさん。真剣な表情で、本を選ぶ 2. 偶然手に取った本は、装丁の青が美しい短歌集 3. 壁面にカラフルなグラフィックが描かれた建物を発見。街を探検気分ですく





1. クリームソーダは、見た目の美しさで頼みたくなる人気メニュー。定番のメロンソーダのほかにも、季節に応じて、桜味や梨味など限定版がメニューインすることも 2. 厚切りでボリュームなピザトーストを頻張る KAINOさん

1 | 2

レトロ喫茶で小休憩

つい時間を忘れて、気づけば長居してしまう「本とおくりもの ヒガクレ荘」を後にして、次に向かったのはその姉妹店となる純喫茶。2つの店舗は徒歩わずか1分ほどの距離にあり、本とコーヒー、そして人との出会いを楽しむには、どちらにも立ち寄りたい場所だ。

訪れたのは「泊まれる純喫茶 ヒトヤ堂」。築50年のレトロなビルを丁寧にリノベーションし、1階は喫茶店、2・3階はゲストハウスとして運営されている。店内に足を踏み入ると、やわらかな照明と木のぬくもりが心をほっと和ませてくれる、どこか懐かしい空気が広がっている。旅の途中でふらりと立ち寄った人も、まるで昔から知っていた場所のように感じられる、そんな包容力のある空間だ。特に朝の時間帯は、この場所が生き生きとするひととき。午前7時30分から始まるモーニングタイムには、外からこの街にやってきた旅人と、日々の暮らしの中で通う地元の人々が自然と交差する。それぞれ

の1日が、コーヒーの香りとともにここから始まっていく。

「宿泊のお客様は、朝食をここでゆっくり召し上がってから出かけていかれますし、毎朝決まってコーヒーを飲みに来てくださる常連さんもいます。週に数回、夜も営業しているんですが、昼間とはまた違った落ち着いた雰囲気になるんです」

そう話すのはスタッフの村松さん。カウンター越しにお客と軽やかに言葉を交わしながら、手際よくトーストを焼いていく。壁にかけられた綴り式のコーヒー回数券が、この店が日々の暮らしに溶け込んでいることを物語る。

かつてこの場所には、約40年にわたり愛された喫茶店「珈琲舎 茜」があった。当時から使われているサイフォン式のコーヒー器具やカップは、今も大切に現役で使われている。店の形が変わっても、空間に積み重なった時間の記憶は息づいたまま。店主が変わっても、ここに流れるやさしい時間と、訪れる人々を迎え入れるあたたかさは変わることなく、この街の風景の一部として息づいている。



老舗鰻店「池作」の味

旧東海道と人宿町通りが交差する十字路、人宿町の中心ともいえるこの場所で、街の景色に溶け込みながらも、どこか特別な存在感を放っているのが、老舗鰻店「池作」だ。揺れる暖簾は奥ゆかしく、けれど昔からこの街を見守ってきた趣をたたえている。店の脇から、香ばしい匂いを含んだ煙が漂い、道ゆく人たちの足を止める。窓の向こうでは、店主が鰻を丁寧に焼いており、お持ち帰りのお客さんが次々と商品を受け取りに訪れていた。うちわのパタパタというリズムが、厨房の中で小気味よく響いている。

昭和元年創業の歴史をもつこの「池作」で、お昼ごはんをいただくことに。店内に入ると、KAINOさんがふと立ち止まり、目を細めながら「もしかしたら、昔来たことがあるかもしれません」とつぶやいた。幼いころ、祖父母に連れられて訪れたことがあるという。店内にただよう料理の香りが、思いがけずその光景を呼び覚ましてくれた。

テーブル席が4つに、小上がりの座敷席2つほ

どのコンパクトな空間。飾りすぎない店内には、長年この場所で受け継がれてきた時間が積み重なっている。鰻専門店ならではのメニューには、定番のうな重やうな丼に加え、たっぷりのわさびを使った「うなわさ丼」や、梅の酸味が爽やかな「うなうめ丼」などのオリジナルメニューも。夜には蒲焼や肝焼きなど、ちょっと一杯楽しみたいときにもぴったりの一品料理が揃う。

そうこうしているうちに、お待ちかねのうな重が到着。ふたを開けると、ふわっと立ち上る湯気と香り。ほんのり甘めのタレが絡んだ鰻は、見るからにふっくらとしており、箸を入れるのも惜しいほど。早速「いただきます」と一口。とろけるような口当たりと、香ばしき、そしてご飯との相性が絶妙で、途中からは山椒をかけて風味の変化も楽しみながら、夢中で食べ進めてしまう。「すこし甘めのタレが絶妙で、美味しかったです。今度は家族を連れて、再訪したいです」とKAINOさん。懐かしい記憶と、変わらない味。「池作」の鰻は、時代が変わっても変わらず、世代を超えてこの街の人々に愛され続けている。

1 | 2

1. 鰻本来の味が楽しめる定番のうな重。お新香や肝吸いが付いてくるのも嬉しい
2. 作ってくれた人に感謝を込めて、手を合わせる





新しいと懐かしいを、行ったり来たり

お腹も満たされ、人宿町をぶらぶらと散策すること。途中、小さな看板に導かれて、おそろおそろビルの階段をのぼり奥へ進んでみると、どうやら古着屋さんのようだ。アメリカで買い付けられた1点ものの古着に、掘り出し物を見つけた気持ちが高き立てられる。店主と少し会話を交わしながら、他のラックもひとつひとつ丁寧に見てまわる時間は、宝探しのようでもある。

心ゆくまで人宿町を歩き、見て、食べて、五感で感じた1日。知らない街を旅しているようで、時折忘れかけていたアルバムを開くような旅でもあった。

「記憶にある人宿町は、私が学生のころなので10年以上前。あの頃とはやっぱり違って、私の知らない街だ！って新鮮な印象でした。洗練されたおしゃれなお店もあれば、『池作』さんのような昔ながらのお店もある。不思議な街ですね」

地元ならではの視点で、この街の魅力も教えてくれた。

「静岡って、素敵なお店はたくさんあるんですが、それぞれの距離が離れていることが多いんです。でも人宿町は、いくつものお店が徒歩圏内にぎゅっと集まっているから、二軒目、三軒目と気軽に歩いて回れるのが楽しい。それでいて、観光地っぽくなりすぎていないというか。どこか下町っぽさも残っていて、そこがまた魅力的なんですよ」

店主と常連客との何気ない日常会話、開店前に慌ただしく準備するお店のスタッフ、すれ違う地元民同士が交わす挨拶。街の景色には、生き生きとした人々の暮らしの営みが溶け込んでいる。そんな安心感とあたたかみが、何度でも訪れたい。次は家族と一緒に、とKAINOさん。生きるように変化し続けながら、どこか懐かしさを残すこの街は、思い出の続きが描ける場所。かつて通った場所に、今の自分で触れてみる。そして自分自身の変化を重ねながら、この場所にまた新しい記憶を刻んでいく。そんな未来を予感させる、穏やかな旅のひとつである。

1. 気になったショップに足を運んで、お気に入りを探す。偶然の出会いを楽しむのも、旅の醍醐味
2. 細い路地、気になる建物を覗いて、街の雰囲気味わいながら歩く



SA THÉ SA THÉ

KAINO Yu 主催の日本茶ブランド。日本の美しい茶畑の風景や茶文化を守る目的で、先祖代々受け継がれてきた“日常にある本物の味”を知ってもらう為に、2020年秋にローンチ。以来、茶葉のオンライン販売やポップアップなどで活動が続けている。

Hitoyado Guide

本とおくりもの ヒガクレ荘

棚貸しの本屋さんを始めたい、という店主の思いからスタートした、小さな街の本屋。セレクトされた本のほかに、おくりものに喜ばれそうな雑貨などが並ぶ。「泊まれる純喫茶 ヒトヤ堂」の姉妹店。

📍 静岡市葵区駿河町6-5 1階奥
IG higakureso



泊まれる純喫茶 ヒトヤ堂

築50年のビルをリノベーションした店舗で、1階は喫茶店、2、3階はゲストハウスを営んでいる。喫茶店のモーニングタイムは、旅行者や地域の常連がこぞって訪れ、憩いの時間が流れる。

📍 静岡市葵区七間町16-8
TEL 054-687-8458 IG hitoya10



池作

大正末期創業、2026年で100周年を迎える老舗の鰻専門店。定番のうな重のほか、店主が考案した「うなわさ丼」「うなうめ丼」が名物。地域の人々に愛され、イトインだけでなくテイクアウトも人気。

📍 静岡市葵区人宿町2-6-1
TEL 054-252-0952



GRAMINE

店主がアメリカから買い付けたヴィンテージアイテムが揃うショップ。90年代のレギュラー古着から、50年代ヴィンテージまで、幅広い年代のラインナップを取り揃えている。

📍 静岡市葵区人宿町2-2-13 近藤ビル 2階
IG gramine_92

